

水野祥太郎先生を偲ぶ

浅 野 達 雄

川崎医科大学に心臓発作後、療養中の水野祥太郎先生を、5月8日、“先生早く良くなって下さい。”と御見舞いして参りましたのに、5月10日、享年77歳の御年で、御永眠されたとの訃報に、ただ声もなく私達は生みの親であり、リハビリテーション医学界の偉大な指導者を失った悲しみにつつまれております。

水野先生は、戦後まもない、昭和25年、諸外国の医療と制度の視察に行かれ、日本のリハビリテーション医療が、欧米先進国と比べ、遅れている現状を痛感され、早急にこれらを導入し、発展させることに尽力し貢献されました。また、リハビリテーションと云う新しい言葉を日本へ紹介された、おひとりであると聞いております。昭和35年、大阪大学教授に就任されて以来、理学療法の専門職となるための厳しい御指導を頂きました。当時、専門書や技術情報の乏しい時代で、先生から国際的な視野のもとに、熱心に御教授下さった講義の一つ一つが、今日、役立っていることを厚く感謝しております。

す。まだ、リハビリテーションを知る人も少なく、各地で講演や、映画会を催し、リハビリテーション医療の知識を社会へ啓蒙されたのであります。昭和39年、初代リハビリテーション医学会長として、リハビリテーション医学、新興の道を開かれ、これに伴う理学療法、作業療法の専門職の必要性和養成を、国へ働きかけて下さいました。

私達を誕生させた後も、真の理解者として、御訓育下さいました先生の御恩を、感謝し決して忘れるものではありません。偉大な指導者を失い、先生に御相談したり、御指導を仰ぐことができなくなりました。私達はこの悲しみを乗り越えて、国際的な立派な理学療法士、作業療法士に成長することが、先生の御遺志に報いることであると信じております。水野先生の数々の御業績を称え、御遺徳を偲び、謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

(大阪大学医学部付属病院 理学療法士)

矢 谷 令 子

電話越しに悲報は静かに伝えて頂きましたのに、一挙に崩れ落ちて行く城壁の轟音ばかりが聞こえて残りました。

あれほどまでに願っておりました、お見舞の一言をも、申し上げきれずに、大事な先生をおおくりしてしまいました。唯、うなだれて後悔あるのみと立ちつくしてしまうのです。そんな脳裏にかけめぐるのは、ありし日のお元氣な水野先生の、あのお顔、あのお姿です。

思えば先生にお目にかかりましたのは昭和42年の理学療法士、作業療法士国家試験の大阪実技試験場の席でありました。先生は大変、御熱心に幾度となく試験場を視察されました。あれから17年余り、先生はさながら燃えるが如き熱血児の精神を、そちこちの席上、壇上に、そして紙上にみせられ、そのお姿を拝見申し上げて参りましたが、先生はいつもはっきりと私見を述べられ、臆される処がありませんでした。ある時は数人の理学療法士、作業療法士に請われるままに夜おそくまでPT、OTの四年制大学教育論に触れ、プロ精神を語って下さいました。大阪大学医学部の名誉教授になられて、川崎医大

の学長および川崎リハビリテーション学院長を兼任なされてからは、ますますPT、OTの養成に関心を示されて、教育に不熱心な態度には、口角あわを飛ばして叱ることも、なさいました。有難さも、懐かしさも今、怒濤のように押し寄せて、抑さえることができません。

「これは私のロマンである。」と今は先生の遺稿となったその著、「ヒトの足」(創元社)の自序に書かれておりますが先生には多くのロマンがひしめきあっていたのではなかったでしょうか。御実弟、大田実先生の陶芸・デッサン・彫刻の世界を、実に誇らしく御紹介下さったこともありました。芸術を語り、山を語り、アフガニスタンの医療事情を述べられ、各国の美味しいものを喰べさせて下さっては、その国の文化を語られ、義手感覚装置の開発の話には一入熱がこもりました。

医の道を説かれた先生のロマンこそを、私達は慎しんで、しっかりと頂戴致します。どうぞお心安らかに、おやすみ下さいませ。

(国立療養所東京病院付属リハビリテーション学院
作業療法士)